

15

味岡三伯の薬効論

—後世方派から古方派への史的概観—

吉川 澄美

東京都

味岡三伯(1629-1689)は黄帝内経の講釈を得意としたことで知られるが、『本草綱目』も講釈し、用薬法の指導にも注力していた。2017年の大会で「味岡三伯の薬性薬効論：『薬性知源』『本草拔書』『薬性記』とその講義録」と題して、臨床応用の観点から簡略化した薬効論と薬性論を伝授していたことを演者は報告した。ところで、日本における薬効論の史的著述の中では後世方派と古方派に大きく分けて、後者が前者を否定する形で突如現れたような論調が多く、味岡三伯に言及したものは見当たらない。そこで、味岡流の薬効論の特徴である1)「三蔵論」に準じた薬効表現、2)分類の採用、3)薬味の組合せに着目して、後世方派から古方派への過渡期における史的立場づけの足がかりとする。

1. 後世方派と味岡三伯の薬物書

江戸時代初期から中期の医学は曲直瀬道三の門下から広がった後世方派の影響が強く、薬物についての教えは『能毒』や『切紙』等から窺える。『能毒』では香附子を最初に掲示して気薬の働きを説く。一方、味岡の『薬性記』では橘皮を最初に掲示して「中気をめぐらし中焦を調和する」と説明する。両者とも、行気を重視する点で共通する。ただし、後者では気薬と中焦との関係をより強調し、それは「中焦穀府」という分類を最初に設けていることから窺える。そして、味岡流の薬効分類は補陰・補陽と続き、全60薬を10種に分けている。

ところで、後世方派の薬物書の発展形として、『本草綱目』の刺激もあり、道三の『能毒』よりさらに薬品数を増やし、漢籍引用を拡充する方向がある。しかし、味岡流では初学者向けに60味に絞り、解説は簡略化している。そして、薬品数をさらに拡張する教育階梯は、組合せによる用薬法・鑑別法を通じて行われた。例えば、『薬性知源』(和文体)では「人参・黄芪」「白朮・蒼朮」等の組を見出しにして編纂している。ちなみに、組薬を見出しにする体裁は、初代味岡三伯と同時代の名古屋玄医の『訓蒙薬対摘要』にも見られる。見出しではないが、遡れば『注能毒』にも二味の組合せによる配合法が見え、味岡流はこれをさらに発展させたと思える。

2. 古方派以降の薬物書への影響

①発病と薬効：古方派の薬物書は『一本堂薬選』(香川修徳)、『薬徴』(吉益東洞)、『気血水薬徴』(吉益南涯)など各々個性があるが、五臓論や婦経説を排した点で共通している。そして、味岡流も婦経説に対して『薬性記』の講義録などで厳しく批判している。ただし、完全に無視しているわけではなく、引用した上で誤謬を指摘している。味岡流の薬効伝授で採用する三蔵論も、五臓論を権道として簡略化したものであり、中国医書を完全に脱却したとは見なし難い。

発病について、南涯は東洞の万病一毒論を継承しながら「気血水のいずれかの停滞により発病する」と展開した。循環を健やかな状態、滞りを発病と結びつけるのは、道三流を継承した味岡三伯の論と通じるところである。

②薬効分類：『気血水薬徴』では『傷寒論』や『金匱要略』で用いられる代表的な漢薬を気血水の3類に分け、さらに気を内位・裏位・表位に分けるなどした。古方派が分類を導入したことは高く評価されるが、上述のように『薬性記』ですでに行われていた。ただし、内容的には相違があり、関連性を指摘するのは早急である。気血水と三蔵、あるいは上焦・中焦・下焦とを対応化させる解釈も慎重を要する。

③薬味の組合せ：『気血水薬徴』では仲景方を基に、「黄芩・黄连」から始まる27種の組合せを掲示している。一方『薬性知源』(和文)においては、64種の組合せが掲示されている。これらの由来は明示されないが、基本処方の集合として『九九選方』があり、そこでは本方81、附方31を14類に分け、薬味構成を分析して類方化している。